

マタイによる福音書 第6章25節～34節

「空の鳥、野の花」【聖書名言シリーズ】

説教者：高橋 誠 牧師

25 「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また体のことで何を着ようかと思ひ煩うな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。26 空の鳥を見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。まして、あなたがたは、鳥よりも優れた者ではないか。27 あなたがたのうちの誰が、思ひ煩ったからといって、寿命を僅かでも延ばすことができようか。28 なぜ、衣服のことで思ひ煩うのか。野の花がどのように育つのか、よく学びなさい。働きもせず、紡ぎもしない。29 しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。30 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。31 だから、あなたがたは、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と云って、思ひ煩ってはならない。32 それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみな、あなたがたに必要なことをご存じである。33 まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものはみな添えて与えられる。34 だから、明日のことを思ひ煩ってはならない。明日のことは明日自らが思ひ煩う。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

YouTubeの配信では、お届けできないが、この前の部分に信徒の方の証し、「恵みの分かち合い」と読んでいますが、信仰の体験談を話していただく時間があります。プライバシーから、また自由な発言ができるように非公開にしています。ご了承くださいれば幸いです。この時間の意図は、牧師

のみならず、キリストを信じる《信仰者》というものがどういうものかを、感じ取っていただきたい、という思いからです。

すでになくなった方のことならば、お話しできる部分もあるか考えます。四年前になくなったMさんのことについてなのですが、お子さんたちが葬儀で一緒しているときに、いつもお母様にこう言われたと、思い出を話されました。「心配しても仕方ないことを、心配している時間がもったはいない」。このご家族は、ずっと家庭礼拝として、お祈りの時間を持ちながら育ててこられたとお聞きしています。そこで、信仰者の模範として刻まれたのは、《信仰者というのは、“思いわずらわれない人”》ということだったと言いうるでしょう。信仰者としての歩みを始めると「神に委ねる」という言葉を覚えます。これは、無責任なことではなく、信頼すべき方を発見するということです。信仰者というのは、《心に心配が充満しない生き方をするもの》と云うことも許されると思うのです。

今日読んだのは、聖書の中でも有名な言葉です。「空の鳥を見なさい。野の花に学びなさい」。思いわずらわれない生き方の模範としての鳥や花を、主イエスはお示しく下さいました。ある方は、「それらも弱肉強食の世界で案外思いわずらって生きているとも言える」とお考えかも知れません。けれども、朝になれば鳥はさえずります。うつむいている鳥は見かけませんし、人と比べて「自分はなんて…」とすねている花も見かけません。

鳥や花という模範に学ばなくてはならないのは、私たちに癖があるからです。私は一時期、声楽家の方のボイストレーニングを受けていたことがあります。練習しても練習しても、次のレッスンの時には元通り、自分のくせに戻ってしまう。先生が模範を示して、そのまねをしながら、自分の癖を乗り越えます。

そう考えると、鳥や花を先生として学びつつ、明らかになる癖もあります。それは、《明日を思いわずらう癖》です。

主イエスの指摘なされる点は、鳥は蒔くことも刈ることも倉に収めることもしないのに対して、人間は、明日を考えて《蒔き、刈り、蓄え》ます。

《蒔く》のは、収穫時期に《刈る》ことを見込むからで、さらにそれを《倉に蓄えて》、一回の収穫期を超えてなお将来に豊かさを備えようとしします。それは、明日という時間を手の中に収めたつもりになる私たち人間の姿と言いうるでしょう。

その成功例としてのソロモンの栄華を、主イエスはお語りですが、あまりお褒めではありません。南の女王が、彼の栄華を見にやってくるのです。そこにあるのは、自分の知恵の誇り、豊かさの誇りです。特に、彼の人生の後半、成功が実った時にこそ、かつての初々しい神への感謝の心は退き、代わって自分の功績の誇りの中へと埋もれてしまうようになってきています。

そうすると、野の花がそれに勝っているのは、神が装ってくださっているという点であって、ソロモンのように自分で装ったのではないという点です。つまり、神につながっているという点なのです。神が自分を装ってくださるまま、あるがまま、無為に咲くのです。そこには、賢しげな人間の知恵が間に入りません。ひたむきな咲き方です。

一方、人間は知恵をもって明日を手にしようとし、うまくれば手にしたつもりになりますが、そうできればできるほど、今度は《苦勞》が気になりはじめます。日本語の「苦勞」は、何かを他制させるよいことでもあります。しかし聖書の原文のこの言葉は《悪いこと》とも訳せる言葉です。思いがけない悪いことが今日を乱すのです。そうすると思いがけない形で明日がやってくる事を知ることになります。できるだけ、悪いことの根を断ち、明日の不安定さを乗り越えようとしします。

ところで、自分に苦しみを及ぼす思わしくない事柄の種を、片っ端から潰しせば安心できるのでしょうか。

おとといの夜だったと思いますが、ラジオでヨシタケ・シンスケさんという、イラストレーター、絵本作家の方が出演し、お話しされていました。

中世の修道院での合い言葉、メメントモリ（汝、死を覚えよ）という言葉をもじった『メメントモリ』という長編を書いたそうです。この方は、50代に入られたぐらいでしょうか。若い頃よりも、やりたいことができ、出したい出版物がいろいろと出せるようになったそうです。そうして、若い頃の不満がいろいろと消えていく。そこで、こんなことを語っておられました。「不満は減ったが不安は増えた。小さい不満はなくなるのだけど、それをどかしたら、もっと大きな、生き物としての不安みたいなものが見えてきてしまう」。

主イエスは、そういう心を持つ私たち人間に対して、「自分の命のことで何を食べるか、飲むかと思わずらうな」と言われます。ある方は、「そんなことはない。医食同源。命は食べること飲むことじゃないか」と言われそうですが、この「命」は、いわゆる生命現象の命ということよりも「魂」とも訳せる言葉ですから、主イエスは生きるということをもっと深く、広く捕らえておられるようです。そうして、食べること、飲むことで癒やせない魂の欠乏がある、と主イエスが言っておられるのです。人間の奥底にある不安と言ってもよいでしょう。いつか自分がいなくなる。死ぬ。そう言う思いです。どんなに豊かにたべて、飲んで、有り余り蓄えられても、そう言う思いには届かない。何を蓄えても、何を装っても、全部置いていかななくてはならないことを、私たちは知っているからです。

そう思う人間に、あなたがたは、鳥よりも優れた人間じゃないか、と主イエスは慰め励ましてくださいます。どこがすぐれているかと言えば、その日暮らしの鳥に対して、私たち人間には明日を思う力があるところです。明日の洞察力、明日の構想力があります。これは、鳥にはありません。こうした明日を思う魂の力は、希望力にもなって人を生かすうるものです。それが、鳥よりも優れている点だと言えます。けれども、せつかくの明日を思う力が、暗い想像に引っ張られてしまうという拭い得ない私たちの魂の現実もまたあるように思うのです。

人間の明日を思う魂は、神がお与えくださったものだと言います。旧約聖書、コヘレトの

言葉で、「神は人に永遠を思う思いを与えられた」と言われているとおりです。明日、さらには永遠も思う魂は、造り主であり給う神を信じるためにあるのです。そうしてこそ、私たちの命は真実の意味で生きます。私たちを生かす神がおられるからこそ、明日を本当に明るく信じることができます。

そのような平安と喜びに生きる生き方は、「神の国」に生きることだと、主イエスは言われます。国について、この頃の政治家の発言できく「国民の生命財産を守るといのが国の使命」という言葉は、そのとおりです。そして、神の国は、私たちの魂にまで届き、明日の構想力を支え、希望に生かしてください。死に対しても命を守る神を知るからです。

これを知る時に苦勞がなくなるわけではないが、苦勞の心配に捕まらなくなります。その日の苦勞はあるのです。けれども、次の日に新しく命を注ぎ、生かしてくださる方がおられるのです。明日は、もう一度新しく、その方によって、次の日の苦勞に取り組めばよいのです。

忙しきでつかれることがあります。体調を崩すかと思うほどつかれましても、暖かい晩ご飯を食べて、お風呂に入って寝ると、力が回復し、次の朝、もう一度やろう！という心が甦ります。

魂に対する神の養いは、さらに深く、人生の様々な苦悩に向き合う力を与えます。今日の苦勞に耐えさせた神は、明日はもう一度力を与えてくださるのです。そのようにしながら、鳥にも、野の花にもまさって、私たちは歌い、咲くことが許されるのです。

今日、あなたが生きているのは決して偶然ではありません。神が、あなたを今日まで守り、生かしていただきました。あなたは決して投げ出されてはいない、あなたに真実を注いでいる私を信じてほしい、と神はあなたに迫っておられるのです。